



福島のこと 放射能のこと

もうちょっと詳しく教えて

振津かつみ医師を囲んで

「核のない未来賞」受賞

日時：11月18日（日）午後2時～4時

場所：四季の森生涯学習センター 2F第3会議室

私たちの質問に一问一答

振津さんは、広島・長崎の被爆者の健康調査に携わり、チェルノブイリ事故後は医師として、人として、ベラルーシの子どもたちを支援し続け、また、昨年三月以降は、福島県内で放射線量の測定や住民の健康被害の調査・相談に取り組みまれておられます。本年9月には長年の活動が評価され、日本人では三人目となる「核のない未来賞」を受賞されました。

主催：『放射能から子どもを守る丹波ネットワーク』加盟団体
どろんこキャラバン★たんば実行委員会/NPO法人風和
丹波篠山避難移住者ネットワーク・こっからネット/ピースたんば
新しい風プロジェクト/つなぎ村こどもプロジェクト
3.11を憶念する会/NPO法人バイオマスフォーラムたんば

問合せ：事務局 足立真理子携帯：080-2533-6972



聞きたいこと持って来て下さい。

<振津かつみさんプロフィール>

内科医師。兵庫医科大学非常勤講師（遺伝学・放射線基礎医学）。医学博士（大阪大学）原爆被爆者の健康管理、チェルノブイリ原発事故被災者への支援活動、また世界の核被害者＝ヒバクシャと連帯した活動など通じて、放射線の健康影響について学ぶ。1991年に「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」を設立し、事務局メンバーとして毎年、ベラルーシの汚染地域を訪問。1996年、ロザリー・バーテル博士らとともに「チェルノブイリ国際医学委員会」に参加し、事故被害を過小評価する国際原子力機関（IAEA）に対抗して開催した「永久人民法廷－チェルノブイリ、環境・健康・人権への被害」で証言。2004年から、「ウラン兵器禁止を求める国際連合」ICBUW評議員。（共編著）『ウラン兵器なき世界をめざして－ICBUWの挑戦－』（合同出版、2008）、（共訳）ロザリー・バーテル著『戦争はいかに地球を破壊するか－最新兵器と生命の惑星』（緑風出版、2005）。

「核のない未来賞」受賞（読売新聞・2012年9月29日）

チェルノブイリ原発事故の被災者支援や福島第一原発事故後、住民の健康相談などに携わった医師で、兵庫医大非常勤講師（遺伝学）の振津（ふりつ）かつみさん（52）が、核兵器廃絶などに取り組む個人や団体に贈られる「核のない未来賞」に選ばれた。29日、スイスで開かれる授賞式に出席し、「過ちは二度と繰り返してはならない」と反核のメッセージを訴える。

ドイツの「フランスモール財団」が毎年選び、約30年にわたる反核活動が評価された。日本人では、写真家の樋口健二さん（2001年）、前広島市長の秋葉忠利さん（07年）に続いて3人目。

振津さんは、大阪医大卒業後、阪南中央病院（大阪府松原市）に勤務。同病院が広島、長崎両市への原爆投下40年目の1985年に取り組んだ大阪府内に住む被爆者1000人の健康調査に携わり、放射線の遺伝的影響に関心を持った。

がんや白血病など人体への影響だけではなく、就職や結婚への差別、子孫への放射線被害の不安など精神的な苦悩が続くことも知った。被爆者の「二度と戦争を繰り返してはならない」という強い思いが、活動の原動力になった。

86年4月、チェルノブイリ原発事故が発生。5年後に現地を訪れ、「放射線被害で苦しむ人が世界中にいる。日本の被爆者と重なった」と帰国後、医師や看護師らと一緒に「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」を設立した。

現地の支援団体を通じ、特に国土の5分の1が放射能汚染地域となったベラルーシの子どもたちが医療機関での受診に必要な交通費や、薬剤の購入費を支援するなどの交流を続ける。

昨年3月の福島第一原発事故の発生後は、福島県内で放射線量の測定や住民の健康被害の調査に取り組む。今年からは月1度、福島市内を訪れ、住民の健康相談にも応じている。ベラルーシの医師や教諭を招き、同県内の被災者との交流会も開いた。

振津さんは「ともに活動してきた仲間全員での受賞。これからも世界中のヒバクシャの声を訴えていきたい」と話している。

